

アブラハム・ボンバのその後

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	16
ページ	64-74
発行年	2020-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001838/

[資料]

アブラハム・ボンバのその後

小山 尚之*

(Accepted November 18, 2019)

What Happened Next to Abraham Bomba

Naoyuki KOYAMA

Abstract: This article is a translation into Japanese of “L’évasion d’Abraham Bomba” contained as a document in *Claude Lanzmann : Un voyant dans le siècle.*, and gives a small comment about it. Abraham Bomba appears several times in the film “Shoah” of Claude Lanzmann in which he testifies principally the work of cutting hairs of transported Jews in the camp of extermination in Treblinka. But in the dialogue with Lanzmann, he reveals many other things. “L’évasion d’Abraham Bomba” is the extract of this dialogue by Juliette Simont, where Bomba describes how he escaped, how he arrived at his home town Czestochowa, how was the reaction of the Jews in ghetto, in what way the revolt got organized, how the Rabbis behaved.

Key words: Abraham Bomba, Claude Lanzmann, Treblinka, Czestochowa

はじめに

本稿は、ジュリエット・シモン Juliette Simont 編集の『クロード・ランズマン 世紀の見者』(二〇一七年)¹に資料として収められている「アブラハム・ボンバの脱走」²を翻訳しコメントを付したものである。アブラハム・ボンバといえば、クロード・ランズマン監督の映画『ショア』において、イスラエルの理髪店で髪を切るしぐさをしながら突然絶句し、苦悩に顔をゆがめる場面が、観るものに強烈な印象をあたえた人物である。彼は、映画の中では、絶滅収容所内のガス室での作業がいかに行われていたかを具体的に語るだけであったが、じつはトレブリンカ収容所から脱走し、故郷のチェストホーヴァに帰っていたのだ。その間のことは映画では詳しく語られていなかったのだが、以下のテキストではその経緯が詳細に述べられている。ランズマンとアブラハム・ボンバとのこの対談がいつ、どこで行われたものなのか正確な記述はないが、もともとは英語で行われたものであり、それをジュリエット・シモンが仏訳し、その

仏訳から筆者が日本語に移したものであることをお断りしておきたい。

アブラハム・ボンバの脱走

『パタゴニアの野兎』のなかでクロード・ランズマンは詳しく語っている。アブラハム・ボンバを探してあちこち訪ねたこと。そしてニューヨーク州の山小屋で彼と対談することに費やされた最初の決定的な日々のことを、『ショア』を観たすべてのものには、トレブリンカの床屋の証言、言い難いものにたいして彼が行う英雄的な闘い、悲しみが彼を打ちひしぐ瞬間などが忘れがたく残っている。C. L.との対話ではもっと多くのことが語られていた。以下のページはそこからの抜粋である。この抜粋は、未聞の明晰さと勇気をそなえたこの男性の別の側面を示している。

ジュリエット・シモン

クロード・ランズマン Claude Lanzmann (以下 C. L. と記す):
絶滅収容所が稼働していたあいだ何人の人がトレブリンカ

¹ Sous la direction de Juliette Simont, *Claude Lanzmann, un voyant dans le siècle*, Gallimard, 2017.

² L’évasion d’Abraham Bomba, op.cit., pp.289-308.

* Department of Marine Policy and Culture, Tokyo University of Marine Science and Technology(TUMSAT), 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

から脱走することに成功したのか、それをおっしゃっていただきたいのですが。

アブラハム・ボンバ Abraham Bomba (以下 A. B. と記す) : 確かなことは知りません。私が知っているのは、多くの人が脱走しようとし、成功しなかったということです。すなわち彼らはトレ布林カの有刺鉄線やゲートのところで殺されたのです。また多くの人が外においても殺されました。なぜなら収容所はウクライナ人の収容所に囲まれていたからです。ウクライナ人も監視塔のある収容所を外側に持っていたのです。しかし蜂起の前は何人かが脱走に成功したと思います。

C.L. : 何人ですか？

A.B. : 十五人か十八人ぐらいでしょう。

C.L. : 正確には分からないのですか？

A.B. : 正確には分かりません。しかし脱走があったことは知っています。

C.L. : 自分も脱走しようという考えがあなたに浮かんだのはどのようにしてですか？ そしていつのことだったのですか？

A.B. : トレ布林カから脱走するという考えですか……。トレ布林カにいたすべてのユダヤ人はそういう考えを持っていました。なぜなら私たちが殺されるだろうことは分かっていたからです。外見的には少なくとも「おそらく」といったような何かがあったのです。おそらく私たちは抜け出せるだろう。いくつかのグループがまとまり始めました。

C.L. : あなた一人ではなかったのですか？

A.B. : 私一人ではありません。私たちはトレ布林カから脱走するという考えを持った八人あるいは十人のグループでした。トレ布林カから脱走する、それは多くのことを意味していました。まず第一にお金が、たくさんのお金が必要でした。私たちは出来る限りのお金を輸送車両から回収しようと努めました。多くの人是有り金全部を身に付けて持っていました。私たちが衣服や背広や靴を選別する作業をしていた際には、時折わずかなお金や、金、ダイヤモンドなどが見つかりました。多くの方は靴に自分のお金を隠していたのです。私たちは、ドイツ兵や、ユダヤ人にすら知られないように、見つけたものを隠していました。誰かがあなたが脱

走しようとしていることを知るの恐ろしいことでした。私があそこにいたときそれは一度起こったのです。ドイツ兵は脱走した人々を捕まえてきました。遠くのアルケンで追いついたのです。ドイツ兵は彼らを収容所へ連れ戻し、足を逆さにして吊り下げたのです。あなたに話しながら思い出すが、そのうちの何人かは何時間ものあいだそんな風に吊るされたままでした。私たちがドイツ兵にどうか彼らを殺してくださいと頼むまでそうなのです。彼らの頭ははちきれそうでした。体の内側にあるものすべてが頭に落ちてきていたのです。ですから私たちが脱走しようとしていることなど、最も親しい身内にすら言うのを私たちは怖れていたのです——兄は弟に話しませんでした。同じく息子は父にも話しませんでした。もし万が一父が、息子が脱走する意図、つまり彼から離れる意図を持っていると知ったなら、彼がドイツ人に「息子が脱走しようとしています」と言うこともあり得たのです。

こんな風にして我々は脱走しようとしてしました。既に申しあげたとおり、お金を貯めながらです。それから服の準備もしながらです。なぜならその時は冬でとても寒かったからです。

C.L. : あなたはどれぐらいのあいだトレ布林カにいたのですか？

A.B. : トレ布林カには大体三ヶ月ほどいました。

C.L. : それではあなたは三ヶ月後に脱走したのですか？

A.B. : 三ヶ月後、そうです、収容所から脱走しました。

C.L. : どのようになされたのですか？

A.B. : どんな風にしたかですって？ 私たちは十人のグループでした。このグループは三つに分けられました。このうちの三人は木曜日に、他の三人は土曜日に、そして最後に残ったものは火曜日に逃げることになりました。私はこの第二のグループにいました。土曜日に脱走するとみなされたのです。脱走するのは単純なことではありませんでした。それはこんな風にして為されたのです。私たちは服の山のなかに隠れなければなりません。私たちが一つのバラックの中にその山を準備しておいたのです。それは列車でドイツに向けて発送されるはずの服でした。そこに、私たち、私と、カウフマンという名前の私のいとこと、ベルコヴィッツ

という名の友人が、服の下に隠れました。作業の終わる二時間前（作業は夕方六時で終了です）、私たちは姿を消し、そこに隠れたのです。二時間のあいだ作業が終わるまで、私たちは服の下で横たわっていました。危険なことでした。もし作業していた人々が服の山を動かしていたら、私たちは窒息していたかもしれないのです。私がそこで作業していた時にすでにこの場所でそんなことが起きていたのです。私たちは、脱走しようとしてうまくいかず、服の山の下で窒息して死んだ人々の代わりとならねばならなかったのです。

C.L. : それは大きな服のかたまりだったのですか？

A.B. : はい。服が集められていた場所も同様に大きかったです。

C.L. : そしてあなたはその山に深くもぐり込んだのですか？

A.B. : もちろんです。とても深く。夕方、点呼が終わると、ウクライナ兵がその中に誰か隠れていないか確かめるために銃剣を突き刺すのです。彼らは私たちの服の山にもそれをやりました。彼らの声が聞こえたのです。彼らが行ってしまった後（点呼は六時に終了しました）、私たちのうちの一人がどんな様子か見るために出ていきました。それはベルコヴィッツでした。彼はバラックの外に出て周りを歩きましたが、誰もいませんでした。外に出ていける、と彼は私たちに言いました。トレ布林カから逃げるのにもっとも確実な唯一の場所は野戦病院^{ラツアレット}でした。他の場所は、三つか四つの鉄柵があり、もっと危険でした。それに有刺鉄線があるとほとんど不可能でした。バラックから出るさい、私たちは誰も見ませんでした。私たちが見たものと言えば巨大な熾火だけです。そこでは服や書類や人間が燃えていました。通過すべき金網がひとつしかない囲い地まで到達するには、この熾火を横切らなければなりませんでした。

C.L. : あなたは横切ったとおっしゃりたいのですか？

A.B. : そうです、この火のなかを。

C.L. : 野戦病院の穴のなかをですか……。

A.B. : はい、燃えている穴のなかをです。私たちは焼けないように自分の服の上に何枚も服を重ね着しておいたのです。

C.L. : あなたたちはその穴のなかに入った。

A.B. : 私たちはそこに入り、横切りました。その次には有刺鉄線の金網がありました。私たちはその上にたくさんの服を重ねました。一人一人登ってゆき、そこを通り過ぎたのです。

土曜日の夜のことで、ウクライナ兵はみなたらふく飲んでいて、監視塔には誰もいません。周囲にも誰もいません。ひとたび向こう側へ行ってみると、誰の姿も見ないではありませんか。私たちは駆け出しました。何時間ものあいだ走りました。

C.L. : 寒かったですか？

A.B. : 凍りつくほど寒かったです。

C.L. : 雪は降っていましたか？

A.B. : いいえ、雪は降っていませんでしたが、とても寒かったです。バラックから出た後、有刺鉄線の向こう側へ行くのに半時間かかっていました。私たちは夜の九時から朝の五時半まで走りました。

C.L. : しかしドイツ兵があなた方の不在に気づかなかったなんて、一体どうしてそんなことが起こるのですか？

A.B. : ドイツ兵にはそんなことはできなかつたのです。それができたのは、彼らが労務班を知っている時だけでした。

C.L. : しかしどうしてあなた方の場合はそうではなかつたのですか？

A.B. : なぜなら毎日彼らは何人かの人間を選んでいたので。

C.L. : 労務班のなかからですか？

A.B. : いいえ。輸送車両で着いた人々のなかからです。それはまるで魔法の円環のようでした。ドイツ兵は何人かを選別し、一日か二日働かせ、それから野戦病院かガス室に送り込むのです。その場でも殺していましたが、このように事が回っていましたから、彼らは労務班が何人いるのか正確には知らなかつたのです。当時彼らはユダヤ人の名前を記録していましたが、ユダヤ人はみな思いつきの名前を名乗っていました。かの地での私の名前はボンバではなかつたのです。私は彼らに自分の名前を告げませんでした。もしかすると自分は脱走するかもしれないと考えていたので、本当の身分を知られたくなかつたのです。他のユダヤ人たちも偽名を使っていました。ですからドイツ兵は、毎日どれだけの人間がいるのか、何人が殺されたのか、正確に知ることができなかつたのです。というわけで私たちは夜の九時から朝の六時近くまで走りました。何キロも走りました……。しかし朝になって私たちがいたのは、まさに私たちが出発した地点だったので。つまりウクライナ人の収容所の中だっ

たのです。

C.L. : あなた方はぐるっと円を描いて走っていた？

A.B. : 私たちは円を描いて走っていたのです。なぜならどこに行くべきか全く分からなかったからです。少なくともトレ布林カから二十キロのところにいるだろうと思っていたのですが、一キロも離れていませんでした。空が薄曇りになり、太陽が昇ってきました。夜明けです。そのとき私たちがどこにいるのかを見て取りました。あいかわらず酔っぱらっているウクライナ兵の声を聞いたのです。私たちはブーク川まで走りました。一時間ほどかかりました。もうすっかり夜が明けていました。私たちはブーク川沿いの森のなかで横になりました。私たちのうちの一人が人の住んでいる場所を見つけました。家というのでは全然なくて、小さな小屋です。私たちはそこへ行き、尋ねました、「ここはどこですか？」と。彼らは言いました、「おやまあ、あなた方は大体トレ布林カから五キロのところにいるんですよ。ここで何をしてるんです？ ドイツ兵が……。走って、走って、逃げなさい！」。しかしどこに逃げるのができたでしょう？ 私たちは行く当てもなければそこに留まることもできません。そうこうしているうちに、一人の男が樽をもって立ち去るのを見たのです。私は彼にどこの人なのか尋ねに行きました。彼は答えました、「ここからそんなに遠くない、小さな村の者ですが」。そこへ私たちが行ってもよいかさらに訊きました。

C.L. : その村はポニアトヴァあるいはヴォルガでしたか？

A.B. : いいえ、ポニアトヴァでもヴォルガでもなかったです。本当に小さな集落で、おそらく全部で四、五軒しかありませんでした。そこで私たちはこの男に訊きました、「あなたについて行ってもいいですか？ お金ならあります。」彼は、怖いだの、なんだのと言いました。

C.L. : 何語であなた方は彼と話したのですか？

A.B. : 私たちは数分の間彼と話ただけです。

C.L. : いえ、何語ですか？ ポーランド語ですか？ イーディッシュ語ですか？

A.B. : ポーランド語です。どうしてポーランド人にイーディッシュ語で話しかけられるでしょう？

C.L. : あなたはポーランド語が上手なのですか？

A.B. : 私はポーランド語は完ぺきに話せます。私の二番目の言語だったのです。最初の言語はイーディッシュ語でした。二番目がポーランド語です。というのも私はポーランドの学校に通いましたから。私が働いていた場所では人々はいつもポーランド語を話していました。

C.L. : その男はあなた方がユダヤ人だと、そしてトレ布林カから脱走してきたのだと、気づいてましたか？

A.B. : もちろんです。私たちがトレ布林カから来たことが分かっていた。というのも彼はすぐ近くに住んでいたからです。彼はこう言いました。「私は荷車と馬といっしょに出発します。あなたがたは何百メートルか離れて後ろからついてきてください。私が止まったら、どれが私の家だかお分かりになると思います。その家のなかに入ってください。」こうして彼の後を追っておおよそ一時間ぐらいのあいだ歩いたあと、私たちは家が五、六軒しかないあの小さな集落に着きました。彼は私たちに、入って、屋根裏部屋に登ってくださいと言いました。その屋根裏部屋には藁やあらゆる種類のものがありました。私たちは言われた通りにしました。そこは薄暗かった。男は登ってきて言いました、「ユダヤ人？」私たちは思いました、「もう終わりだ、ドイツ兵は私たちがどこにいるか既に知っている。」しかし、そうではなかったのです。この小さな共同体の長がやって来ました。彼は寛大な人でした。彼は言いました、「怖がらないでください。私があなた方を鉄道に乗れる場所まで連れていきましょう。」私たちの願いは列車でチェストホーヴァに戻ることであったのです。

C.L. : あなた方はチェストホーヴァに帰らなかったのですか？

A.B. : 私たちはチェストホーヴァに帰らなかった。なぜならその時は、たぶん親も生きていたろう、おそらく兄弟も生きていたろう、と私は考えていたからです。私は兄弟の身に起こったことをまだ知らなかったのです。彼は最初の輸送車両とともに発っていました。私には彼は生きていたと言われていたのです。しかし私がゲットーに戻った時、私はこう言われました、「申し訳ない、われわれがあなたに彼は生きていたと言ったのは、あなたが少しでも喜びを持てるようにするためだったのです。」しかしあの瞬間は、私は何も知らなかった。だから私たちはチェストホーヴァに帰ら

かったのです。

C.L. : 家族と再会するために？

A.B. : 生きている親たちと再会するためです。例の男は私たちがザグロドニキという名前の小さな村まで連れて行ってくれました。そこに着いた時、また夜になりました。私たちは森のなかに隠れました。私たちは周囲にドイツ人やほかの人々の物音を聞きました。しかしじっとして動きませんでした。朝になって私たちは動こうとしました。一人の女がやって来て、村を一巡りしていました。そこは本当に小さな村だったのです。友人のベルコヴィッツが彼女の方へ行き、言ったのです、「あなたのお宅にお邪魔できませんか？ 何か食べるものはありますか？」彼女は言いました、「ええ、お入りなさい。」私たちは彼女の家に入り、彼女は私たちのためにコーヒーを入れてくれました。そして言ったのです、「あなた方がトレ布林カの人たちだというのが分かりますわ。匂いで分かるんですよ。十キロ離れていてもトレ布林カの匂いは判別できます。夜、風がこちら側に吹くと、私たちは肉の匂いを感じるのです。」私たちは一日そこで過ごしました。夜になると、家の人々は、家のうしろに隠れてほしいと私たちに言いました。外は氷のような寒さで、私たちは体の芯まで冷え切りました。私たちがそこにいることを知らない隣人たちが来ていたのです。友人のベルコヴィッツは仕立て屋でした。私たちのいた家の住人はそのことを知っていました。この家には二人の義理の姉妹と一人の夫がいたのですが、私たちはそのうちの一人の女をワルシャワに生地を買いに行かせたのです。わが友人の仕立て屋は彼らに服を作ってやりました。その場所に私たちは一週間留まりました。そのあと、一人の義理の兄弟が、三人のユダヤ人がトレ布林カから脱走したことを聞きつけ、一人の仕立て屋がそこにいるのを知りました。彼はやって来て言いました、「仕立て屋が入り用なんだ。おれたちに服を作ってもらいたい。そいつに家に来てもらいたいんだがね。」そのときベルコヴィッツは言ったのです、「私は友人二人と一緒にいるんです。」相手はそれを知りませんでした。「他に二人もいるだって？ 困ったな。そいつらをどうしよう？ ——おれたちと一緒に来るがいいや。」彼は私たちが自分の家に連れて行き、食事をさせてくれました。私たちは、先の

場所のように家の外ではなく、家のなかで眠りました。それから、ザグロドニキから、二人の男が私たちがワルシャワに連れて行きました。私たちはワルシャワからチェストホーヴァに直行で行く切符を買うことはできませんでした。なぜなら政府の許可証を持っている必要があったからです。もし長官があなたに許可証を与えていたら、それだけの距離を旅することは出来ました。そうでない場合、あなたは二十五キロ以上移動することはできなかったのです。一緒についてきてくれた男が料金を支払ってくれました。こうして私たちは許可を得ることができたのです。

C.L. : どんな種類のお金をお持ちだったのですか？ ズロチですか？

A.B. : ズロチもありましたし、ドルもありましたし、いろんな種類のものです……。

C.L. : お金はたくさんお持ちだったのですか？

A.B. : いいえ、たくさんではないです。でも、うまく切り抜けるのに充分な額は持っていました。駅には私たち三人きりしかいませんでした。列車は夜の十一時三十分に出発です。ユダヤ人だけでなく、ポーランド人も夜の八時以降列車に乗るのは許可されていなかったのです。私たちは駅の周囲を歩きましたが、そこはドイツ人やSS 隊員でいっぱいでした。しかし誰も私たちを困らせるようなことはありませんでした。十一時三十分電車に乗り、日曜日の朝チェストホーヴァに着きました。そこから駅を出て、街なかを歩き、ゲッターに入るのは恐ろしいことでした。ですから私たちは馬車を借り、チェストホーヴァの外に出て、夜が落ちるのを待ったのです。冬ですと午後四時にはもう真っ暗でしたから。そうってから私たちはゲッターの内部にもぐり込んだのです。多くのユダヤ人が非合法的にゲッターの外へ出ようとしていました。私たちも、中に入れさせてもらいたかったので、ポーランド人の警官にお金を支払いました。最初に私たちを見た人々はそれを信じることはできませんでした。私は顔も知られていて、チェストホーヴァに理髪店も持っていましたし、いくつかの組織にも所属していました。みな私のことをよく知っていたのです。人々が近づいてきました。「いったいどこから来たんだね？ あなた方が強制収容所へ送られたことは知っているのですが。」私は言いました。

「トレ布林カからです。」「トレ布林カから？ トレ布林カの話は聞いたことがあります。何人かの人がそこから抜け出してきて、その話をしたんです。あなた方はどうやったのですか？」「ええ、私たちはトレ布林カから来たんです。」「その地で私の母の身に何が起こりましたか？ 私の父の身に何が生じましたか？」私は言いました、「何ですって、彼らの身に何が起きたかですって？ もう誰も生きていません。」「どうしたっていいますか？ 気でも狂ったのですか？ あり得ないことだ。何がしたいのです？ ふざけてるんですか？ ゲットーのなかにパニックをまき散らしたいんですか？」私は答えました、「いいですか、あなたたちは私の言うことを信じる気があるのでしょうか、それともないのでしょうか？ 私はあそこへ妻と母と家族全員で行ったのです。彼女たちが生きているにもかかわらず、私が彼女たちを置いてここに戻ってきたと思っているんですか？ 私の家族もあなたたちの家族もみな死んだのだと知っていただきたい。」しばらくの間何人かはもう口をきくことができずでした。彼らは私の言うことを信じなかったのです。彼らは自宅に帰り、私たちは一人の友人の家にきました。彼は私と一緒に理髪店で働いていた男です。彼は言いました、「ここで何をしているんだ？ おれの妻に何かあったんだ？」同じ質問です。そして同じ反応です。「何かお前たちは変だ。ここに戻ってきたのはおれの知らない何かを手に入れるためだろう。何か欲しいんだな。おれたちはお前らを信じないぞ。気が狂っているに決まっている。お前たちの眼つきも、振る舞いも……。気がおかしくなったに違いない。なぜならお前たちの話すことはあり得ないことなんだから。」そこで私たちはもう一度繰り返しました。「あなたたちが信じようと信じまいと、現実はこの通りなのだ。もう二度とあなたたちの家族に会うことはないだろう。彼らは死んだんだ。永久に死んでいるんだ。」

C.L. : チェストホーヴァにはまだユダヤ人がたくさんいたんですか？

A.B. : 当時はまだ五千人いました。当初は、小さなゲットーでしたが、五万人いたんです。四万五千人が強制収容所へ送られていたのです。残っていた人々は工場で働いていました。

C.L. : ドイツ人のために？

A.B. : ドイツ人のためにです。チェストホーヴァには爆弾を、ドイツ軍のためのあらゆる種類の爆弾を製造する工場があったのです。彼らはそこで働いていたのです。

C.L. : ドイツ人はゲットーの中に入ってこなかったのですか？

A.B. : ドイツ人は入って来ませんでした。なぜか？ なぜなら彼らはユダヤ人警察を持っていたからです。「お前たちはここで何をしているのだ？」と言ってやって来たのはこの警官たちでした。私たちは言いました、「“お前たちはここで何をしてる”とは何て言い草だ。あんたがたは警察だが、私らに触れたり何かをさせようと思っているなら、覚悟した方がいい、あんたがたを殺すからな。私らはもう死ぬなんて怖くないんだ。死が何を意味しているか分かっているんだ。たとえあんたがたがゲットーの警官であろうと、私らにとって、そしてあんたがたにとって、これから起こることの意味が分かっている。あんたがたは守られているなんて思わないことだ。私らはあんたがたのような顎を突き出して、二つ星か三つ星あるいは四つ星をつけた人が、たくさんトレ布林カに到着するのを見たんだ。彼らはまっすぐガス室行きだった。自分たちは違うだろうなんて思わない方がいい。もしあんたがたが私らに何かをするつもりなら、私らはあんたがたを殺しますよ。」実際彼らは一切私たちに触れませんでした。

私たちはゲットーで何かをする必要がありました。私は床屋でしたから、理髪店で髪を切りました。あの町で人々は私を雇ってくれたのです。なぜなら私は知られていたし、お金も持っていたからです。彼らは空腹で死にかけていました。なにしろ私にはお金があったので、彼らのために食料を見つけようと努力しました。しかし問題もありました。特に女たちとの間でです。彼女たちはどうしても、夫が死んだ、両親が死んだということが納得できなかったのです。ある時、デーゲンハルトという、ユダヤ人すべての選別を行っていた男がいたのですが……。

C.L. : ドイツ人ですか？

A.B. : ええ、ドイツ人です。チェストホーヴァの司令官で、四万五千人のユダヤ人を収容所へ送った男です。ゲットーの人々はデーゲンハルトを探しに行き、彼に言ったのです、「私らはここにトレ布林カから戻ってきた男たちがいる

のを把握しております。彼らはいたるところでみんな死んだと言いふらしてパニックを引き起こしております。」

C.L. : ユダヤ人たちがデーゲンハルトに会いに行った？

A.B. : そうです。そしていま言ったようなことを彼に言ったのです。彼は何と答えたと思います？ 「もしその男たちがトレブリンカから戻ってきたのなら、できる限り長くここに居させてやりなさい。」私たちは二晩と同じところで眠りませんでした。恐ろしかったのです。たいていはゲットーの外で、今日の夜はここ、明日の夜はあそこ、と言った風にです。告発が恐ろしかったし、人々がまた「あいつらはトレブリンカから来たんだ」と言うのが怖かったのです。私たちはゲットーの外のキリスト教徒の家（私にはキリスト教徒の友人がいたのです）に留まろうと努めました。幾晩か彼らの家で過ごしました。それから戻ったのですが、こうしたすべては収まっていて、もはや問題ではありませんでした。ゲットーの警官たちは私たちに全く接触しに来なかったのです。善いにつけ悪いにつけ、ドイツ人と一緒に働いていた警官と委員会は、なんとしてでも女と子供たちを救おうとしていたのです。

C.L. : あなたの考えでは、ユダヤ評議会の議長はトレブリンカに関する真実を知っていたのでしょうか？

A.B. : ええ、全部知っていました。どうしてそう言えるかという、私が彼に全部話したからです。彼は散髪に来たんです。彼だけではありません。長老議会の人々も全員です。彼らは私に会いに来たんです。ですから知っていました。しかし各人は、ほかの人の家族を犠牲にしてでも自分の家族を救うチャンスを得ようとしていました。つまりゲットーにいる身内を守るために誰かほかの人の家族を強制収容所へ送るということです。しかしそんなことは不可能だったのです。私はそのことを彼らに言いました。「あなた方がユダヤ人であるかぎり、あなた方はユダヤ民族の運命を共にすることになるのです。ここで指揮をとっているあなた方ですら、今日は力のある人間でも、明日か、一時間後か、あさつてには、もうなにもものでもなくなるのです。われわれのような人々すべてと同じように。あなた方もほかのみんなと同じように殺されるでしょう。」そしてこれは実際に起こったことなのです。ユダヤ評議会にいた全員、長老議会にいた全員を一

一彼らに与えられていた名称などどうでもいいことですから—ドイツ人は、議長も秘書も警官も、みんな殺してしまいました。なぜなら彼らはあまりに事を知りすぎたからです。

C.L. : その人たちはトレブリンカで殺されたのですか？

A.B. : 何人かの人々はトレブリンカに送られましたが、そのほかの人々はユダヤ人墓地に連れて行かれ、そこで殺されました。こんなことが起こった後ですら、まだゲットーで生き残れると考えていた人たちがいました。

C.L. : あなたの言うことを聞こうとしなかったユダヤ人のこうした盲目をあなたはどう説明なさいますか？ これはとても重要な質問です。

A.B. : ええ、分かります。しかしこれは盲目なのではありません。そのように言うことはできないのです。あの時起こっていたことを信じてることができる人はこの世に誰もいなかったのです。あなたもご存知だと思いますが、ユダヤ人というのは強い民族です。ほかの民族だったら私たちが蒙ったことに耐えて生き延びることはなかったでしょう。ポーランド人、フランス人、そのほかの民族であったなら、蠅のように落ちていたでしょう。しかしユダヤ人は生きる意志を、たとえ苦痛のなかですら生きる意志をと私は言いたいのですが、そういう意志を持っています。ゲットーでも彼らは生き生きしていました。なにも信じない人々を「盲目だ」とあなたがおっしゃっても構いません。しかしユダヤ人はこれからも生きていくと信じていたのです。全員が生きていけると信じていたわけではありません。おそらく十パーセントすら生きていけるとも思っていなかった。何人かが抜け出すだろうことを信じていたのです。一つの事実としてあるのは、私のような人間、ガス室で作業をし、想像するのが困難なさまざまなことをやってきた人間が、ついには抜け出し、絶滅収容所の外、ポーランドの外、ドイツの外で、自由な人間となっているということです。ユダヤ人に残されていた唯一のもの、それは希望、信じていたことだったのです。なぜ彼らは私を信じなかったのか？ なぜほかの強制収容所や絶滅収容所から戻ってきた人々を信じなかったのか？ なぜなら誰も、この二十世紀の世の中で、私たちが話したような何かが生じている最中だなんて信じていることができなかったからです。なぜならユダヤ人であろうと、キリスト教徒

であろうと、ほかの人々であろうと、私たちは人間という存在だからです。誰もそんなことを信じるができなかった。しかしながらそれは起こってしまった。ゲットーにいたユダヤ人は自分たちの親や妻や子供が死んだなんて信じられなかった。彼らは希望を持っていたのです。ほかにどんなことができたでしょう？ 生き続けること、それが彼らの為し得たすべてです。毎日のようにユダヤ人が殺されていたゲットーでも、私たちは子供たちのために学校を設けていましたし、劇場もありました。ですからあの当時を生きていた人々は、自分たちが人食い人種であったという記憶はなく、人間であった、ユダヤ人という人間であったという記憶を持っていたのです。

起こったことは恐ろしいことです。ゲットーの中もまた恐ろしかったのです。ユダヤ人の生活、それは生に留まるために、存在の各時間、各分、各瞬間に闘うことであり、わずかな食料のために、ドイツ人によって死へ送られることなく眠れる場所のために闘うことだったのです。ユダヤ人は生き残るために闘っていたのです。誰も、ほかのどんな民族も、こんな状況でドイツ人に対して蜂起を起こすことなどできなかったでしょう。ユダヤ人以外の誰も。しかしそれは、ビャウイストクのゲットーで、チェストホーヴァのゲットーで、ワルシャワのゲットーで実際に起こったのです。その地でドイツ人に対する最初の蜂起が始まったのです。これはユダヤ人にとってのみ可能なことでした。フランス人は自由でした。ユーゴスラビア人も、チェコ人も。彼らは自由だった。彼らは移動したり、話したり、食べたり、家族と一緒にいることができました。それなのに彼らはドイツ人に対して蜂起を起こさなかった。私たちユダヤ人は、あれらすべてのゲットーで、日に日に私たちの数が少なくなっているのを知っていました。しかし私たちの歴史には、まさにシリアに蜂起した際のマカベア家の人々のようななにかがあるのです。私たちには私たちのマカベア家がありましたし、私たちの民族がいました。しかも私たちは、私たち自身のために抵抗すべきではなかったのです——というのは私たちは、今に至るまで生きながらえるだろうとか、ドイツ人と隷属から解放されてイスラエルで自由な身で再会するだろうとは全然考えていなかったからです。どんな条件のもとで私

たちが生きているかはどうでもいいことです。私たちが奴隷であろうと大したことではない。私たちはわが民族のためにそうすべきだったのです。ユダヤ民族は生き残るだろう。そして私たちユダヤ人は、まわりの情勢や状況がどんなものであろうと、つねに、ユダヤ民族の生き残りにたいする信念「故に」、生に留まり続けるだろう。なにがユダヤ民族に起ころうとも、ユダヤ民族は生き残るだろう。これがゲットーのなかの人々の希望だったのです。私たちがゲットーに居続け、組織を持ち、戦闘員を有し、森のなかにも戦闘員を持っていたのは、そのためなのです。私たちが闘うためにゲットーから外に人間を送り出しました。彼らのうちの何人かは、いや、何人かではありません、九十九パーセントは殺されました。私たちの仲間の何人か、ヴィズレイヴィッツという名前の男と、そのほかの男たちが、トレ布林カから戻ってきて、そこで起こっていることを見ていました。それは一九四三年の一月のことでした。その時ドイツ人はゲットーを清算し始め、ゲットーの人々を強制移送し始めたのです。ヴィズレイヴィッツと数人は武器を持っていたので、ゲットー内のSS隊員を殺そうとしました。何かをしなくてはならないと私たちも分かっていたのです。私たちは自分の同胞にたいして義務があったのです。蜂起の起こったところではどこでも、このようにして始まったのです。これがチェストホーヴァのゲットーで起こったことです。私たちに男たちが、善良な男たち、あなたなら出会わないような男たちがいたのです。ユダヤ民族の信仰を世界に示すために闘い、命をささげる男たちが。ユダヤ人たちは屠殺場の羊のように死へ赴いたと、こんにち言う人が何人かいます。それは真実ではありません。羊のように死へ赴きなどしませんでした。おそらくほかの民族なら、ドイツ人を前にしたときに私たち以上にへり下っていたらと思うますよ。

トレ布林カで起こったある出来事をお話ししましょう。輸送車両によってワルシャワ近くの都市から到着した一人の女性が、どうやってか分かりませんが、ガス室内で起ころうとしていたことを理解してしまったのです。彼女は剃刀の刃を持っていて、それで一人の労務班の喉を切ったんです。

C.L. : ユダヤ人労務班の喉を？

A.B. : ユダヤ人労務班たちのうちの一人です。もう一人別の労務班が彼を助けようと試みたのですが、彼女はこの男の喉も切りました。彼は床屋たち監視役^{カガバ}でした。先の男は生き延びましたが、彼の上司とでも言うべき男は死んでしまいました。ドイツ兵は彼を病院に連れてゆき、救命のためにあらゆることを試みました。しかしうまくいきませんでした。トレ布林カで死んだ人間の唯一の墓、それが彼の墓でした。彼は、普通の人間存在が世界のいたるところでそうされているように、埋葬されたんです。

C.L. : 続けてください、エイブ。

A.B. : これが、ユダヤ人がドイツ兵によって殺されたのでもなく、ガス殺されたのでもなく、輸送車両で到着した女の手によって殺された唯一の例です。

C.L. : ユダヤ人が埋葬された唯一の例だとも、あなたはおっしゃいましたが。

A.B. : 唯一の例です。ドイツ兵たちは彼を救うためにあらゆる手立てを尽くしました。ナチスの人間たちにとって彼はまるで英雄、ユダヤ人の英雄だったのです。彼は野戦病院のすぐそばに埋葬されました。これがトレ布林カのユダヤ人たちの歴史のなかでの唯一の墓なんです。彼は葬式をしてもらった唯一の人間なのです。彼の葬式にはすべてのドイツ兵が集まりました。そしてトレ布林カのすべてのユダヤ人労務班は、埋葬されるために運ばれる彼の亡骸に敬礼をせねばなりませんでした。

悪いユダヤ人もいたことは確かです。言わなければなりません、チェストホーヴァのゲットーでは、ドイツ兵に協力する人間がいました。私たちは組織を持っていましたから、彼らは私たちのことを密告したんです。彼らはドイツ兵にこう言いました、「ゲットーで抵抗運動があります。もうじき蜂起が起こるでしょう。」この件のために私たちはあることをしました。裁判官と弁護士がいましたから、私たちは法廷を設けたのです。裁判官たちは、ドイツ兵のために働きたちを密告した人々はユダヤ人ではない、という裁定を下しました。そうした人々は人間存在ですらなかったのです。この話の最後はどうであったかという、裁判官が彼らに有罪を宣告し、彼らは殺されたんです。彼らは、見せしめのために、私たちユダヤ人抵抗運動組織の人間たちの手で

死ぬまで殴られたんです。ゲットーには悪い人々もいましたが、大部分の人は善良で勇気があり誠実でした。そしてそういう人々が闘っていたのです。

C.L. : ラビたちはどのように振る舞っていたのですか？ あなたは生き残る意志についてお話しされましたが、それは深くユダヤ教に結びついていますね。

A.B. : はい、そういった意志はユダヤ教のラビたちにおいてとても強かったと思います。なぜなら彼らはいつの日かメシアが来るだろうと信じているのですから。状況がどのようなものであれそのことを信じているのです。すべてのユダヤ人のなかでもっとも苦しんだのがユダヤ教のラビたちです。ラビではないユダヤ人たちはうまく切り抜けることができました。気づかれずに通ったり、ひげを剃ることができたのですが、ラビたちにはそれが出来なかったのです。彼らの苦しみは甚大でした。どのようにしてドイツ人がラビたちのあごひげやこめかみの巻き毛に襲いかかり、それを切ったり、引き抜いているか、私はこの目で見たことがあります。トレ布林カではドイツ兵はラビたちを別のところへ連れてゆき、彼らに一種のサーカスを強要したんです。自分たちのためだけにラビたちに歌わせて踊らせたのです。覚えているのはワルシャワから到着した輸送車両にいたラビたちです。彼らはガス室に行く前に、あらゆる種類の辱めを受け、非常に苦しみました。しかし彼らは生きながらえること信じ、別の生を信じることを止めませんでした。ガス室に入るときも、彼らは「聞け、イスラエル^{シエマ・イスラエル}」を語っていました。彼らが閉じ込められた後も、まだ「聞け、イスラエル^{シエマ・イスラエル}」という呼びかけを強く聞くことができました。またある時は、コソフという小さな村から人々が到着したのですが、その中にはたくさんラビがいました。彼らは列車でやって来たものではありません。徒歩で来たんです。彼らを突き飛ばすドイツ兵と一緒に。そのとき、イオルカが競争のようなものを組織したんです。彼は場所を整備して……。

C.L. : イオルカというのは、SS 隊員のクルト・フランクのことでしたね。

A.B. : ええ、SS のクルト・フランク。でもその時は私たちは彼の名前を知りませんでした。私たちは彼をイオルカと呼んでいたんです。

C.L. : 「人形」という意味ですね。

A.B. : そうです、ポーランド語で「人形」という意味です。イオルカはこんな風に事を組織したんです。大きな運動場があったのです。そのそばにあのソソフの人々が裸でいました。彼らは両手で頭を覆いながら（なぜなら彼らの頭は坊主になっていたからです）、完全に裸でガス室へ向かって行進したのです。彼らは「^{シエマ・イスラエル}聞け、イスラエル」を歌ってました。というのは分かっていたからです。彼らはトレ布林カからほんの数キロのところに住んでいましたから、何が起きるか分かっていたのです。それが終わりだということも悟ってました。彼らもまたあの「^{シエマ・イスラエル}聞け、イスラエル」の祈りとともにガス室へ入って行きました。ラビとして、彼らは、自分たちの命はガス室で終わらないことを知っていたのです。彼らにとって、生は彼らの肉体を離れるが、しかし死の後も、もうひとつ別の生があるのです。それゆえ彼らは泣き叫んだりせず、このようにガス室に入っていったんです。しかしあの別の生を信じながらです。人間の肉体はNeshama「ネシャマ」と呼ばれる魂を離れるが、「ネシャマ」によって彼らは死後も生き、そのおかげで彼らは強くなっていると信じながらです。

彼らがガス殺された時、運動場では見世物が始まっていた。ただちにガス室の労務班たちが、互いにしがみついている死体を外へ出しているところでした。なぜなら死んだ後も彼らは抱き合ったままだったからです。彼らは、生においても死においても、お互いに離れようとしなかったのです。このようにして彼らの死体はガス室の外へ出されました。それから掘られた溝のなかに重ねて置かれました。そして焼かれました。まるでスペインの異端審問の頃にように。

ラビたちは——私自身はラビではありません、たんなるユダヤ人の男です——魂を込めて、心の底から、来るべき世界、神を信じていました。彼らはとても幸せな人々だったと私は言います。彼らは、彼らの宗教や神にたいして一言も発することなく、最悪の苦しみのなかを通り過ぎてゆきました。この神は、善と悪が起こるようにした神です。ガス室を發明しユダヤ民族の災いとなったヒトラーとドイツ人を創造した神なのです。彼らは、物事は起こるべくして起

ると信じていました。もし彼らが、ヘブライ語で Kiddush Hacam「御名の聖化」と呼んでいるもののために、彼らの魂——「ネシャマ」——を差し出すことができれば、彼らは幸せだったのです。もし一人のラビが「御名の聖化」のために死ぬとしたら、それは、彼がみずからを供儀に付した——ちょうどイサクが神の御名とその民族の名においてみずからを供儀に付したように——ことを意味するのです。こんな風に彼らは信じているのです。それゆえに私は彼らを本当に崇拜しているのです。私どものなかには神を信じない者あるいはほとんど信じない者もいました——特にチェストホーヴァではそうでした。その地には社会主義者や共産主義者その他の組織があったのです——が、彼らは自分たちは動物のように殺されるだろうと考えていましたが、彼らの苦しみと死は、神の名のもとに神の民のためにみずからを供儀に付すと信じていたラビたちの苦しみと死よりずっとひどいものだったのです。ラビたちの神に対する信仰がユダヤ人をまとめてきたのだと言いましょ。一つの国から他の国へと移動し、どこの出身でもないユダヤ人が、もし彼らの宗教を持っていなかったなら、ユダヤ人は消滅していたことでしょう。

おわりに

アブラハム・ボンパのこの証言の中でもっともやりきれない思いをさせられるのは、トレ布林カを脱走した彼らが故郷のチェストホーヴァに戻った後のゲッターのユダヤ人住民の対応だろう。危険を冒して逃げてきたにもかかわらず、故郷のユダヤの人々は誰も彼らの言うことを信じようとしなかった。冷たくあしらった。彼らを密告するものさえいた。真相が明らかになり始めると、今度は他人の家族を犠牲にしてまで自分の家族を救おうとする評議会のメンバーたち。きっと八方ふさがりの絶望感がアブラハム・ボンパを捕らえたに違いない。しかしここでアブラハム・ボンパは虚無に陥らなかった。それは彼がトレ布林カで見たラビたちの姿に負うところが大きかったように思われる。東ヨーロッパのラビたちは（そして現在のラビたちも）独特の風貌をしている。黒い帽子に黒い上着に黒いズボン。白いシャツ。ひげを剃らずこめかみの毛を切らずカールさせている。ラビではないユダヤ人ならヨーロッパ人にまぎれる

こともできたようだが、ラビたちはそうはいかなかった。彼らは律法によってひげを剃ることもこめかみの毛を切ることもできなかったからだ³。自分たちの容姿そのものがみずからのユダヤ性を告げていたのである。ドイツ人やナチスがこんな彼らを放っておくわけがなかった。SS 隊員はガス室に彼らを送り込む前に、歌を歌わせたり踊らせたり全裸で行進させるといった辱めを加えた。しかしラビたちは神を呪うことなく「聞け、イスラエル」を唱えながらガス室に入り、ガス殺後も互いに抱き合っていた。その様を見てアブラハム・ボンバは、「御名の聖化」において生き残るユダヤ人の意志を体感したのだろう。ランズマンが盲目を見るところに、アブラハム・ボンバは生き残る意志を対置する。

とはいえアブラハム・ボンバの語る事実の中には凄まじいとしか形容できないものが多々ある。彼らが死体を焼いた後の熾火の上を走って逃げたこと。輸送されてきたユダヤ人の女性が剃刀の刃でユダヤ人労務班の喉を切ったこと。これによって殺されたユダヤ人労務班がドイツ兵によって手厚く葬られたこと。チェストホーヴァのゲットーにおいてすら脱走したボンバたち

は転々と寝床を変えていたこと。密告したユダヤ人をボンバの組織が殴り殺したこと。筆者は、アブラハム・ボンバが生き延びたことを良かったことであると強く肯定する者だが、しかしそこに至るまでに彼がどれだけ酸鼻な体験をくぐらなければならなかったかを思うとき、単純素朴な「良かった」という声は筆者の中で沈黙してしまう。アブラハム・ボンバの体験したことは人を絶句へ追いやる。質問するランズマンにおいてもそのうろたえぶりが透けてみえるところがある。ボンバの証言が途轍もないものであることは確かだ。

なお翻訳について最後に一言。筆者が「ラビ」と訳したフランス語は *les religieux* 「宗教指導者」である。ジュリエット・シモンがなぜ *les religieux* という婉曲な表現を採用したのかよく分からない（英語の原文でもそうなのかもしれない）が、ユダヤ教における宗教指導者といえば、それはラビを指すからである。「宗教指導者」と訳すより「ラビ」と訳したほうが具体的に分かりやすいのではないかと考え（たとえばラビはひげを剃ったりこめかみの巻き毛をきることができない）、あえてこう訳した。

アブラハム・ボンバのその後

小山 尚之*

(* 東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策部門)

本稿は、ジュリエット・シモン編集の『クロード・ランズマン 世紀の見者』（二〇一七年）に資料として収められている「アブラハム・ボンバの脱走」を翻訳しコメントを付したものである。アブラハム・ボンバはクロード・ランズマン監督の映画『ショア』に何度か登場する人物であり、映画の中ではトレ布林カ絶滅収容所に強制移送されたユダヤ人たちの髪を切る作業をしていたことを主に証言していた。しかし彼は映画の中で語ったこと以外の多くのことをランズマンとの対話で明かにしている。その抜粋がジュリエット・シモンによって編まれ訳された「アブラハム・ボンバの脱走」である。そこでは、いかんにして彼が脱走したのか、どのようにして故郷のチェストホーヴァにたどり着いたのか、ゲットーの人々の反応はどうだったのか、蜂起がどのように組織されたのか、ラビたちの振る舞いはいかなるものだったのか、などについてが語られている。

キーワード: アブラハム・ボンバ、クロード・ランズマン、トレ布林カ、チェストホーヴァ

³ 「レビ記」第二十一章一～五。「主はまたモーセに言われた、アロンの子なる祭司たちに告げて言いなさい、……彼らは

頭の頂を剃ってはならない。ひげの両端をそり落としてはならない。」